

## 子どもの仲間関係における 社会的受容度の仲間評定と自己評定

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成7年4月28日受理)

仲間関係に問題をもつ子どもは、後年の青年期や大人時代においても社会的適応の問題に直面しやすいと指摘されている(Hymel, Rubin, Rowden, & LaMare, 1990; Parker & Asher, 1987)。このため、子どもの仲間関係に関する最近の研究は、仲間拒否や社会的孤立と関連する行動的特徴や社会的・認知的特徴を明らかにすることに関心を寄せている(例えば, Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; Hymel & Rubin, 1985)。これらの研究から得られた知見は、仲間関係に問題をもつ子どもを対象とした介入指導プログラムを計画するのに利用されている(例えば, Bierman & Furman, 1984; Matson & Ollendick, 1988; Pope, McHale, & Craighead, 1988)。通常、介入指導の対象となる子どもは直接的な行動観察情報、あるいは仲間や教師による間接的なアセスメント情報を通して選出される。しかし、子どもの社会的問題に関する観察者、仲間および教師の見方がどの程度一致するのか、あるいはこれらの見方と子ども自身の見方がどの程度一致するのかについては十分に検討されていない。特に重要な点は、拒否児や孤立児のすべてが自分の仲間関係について同様の自己知覚をしているとは限らないことである。

仲間関係やコンピテンスに関する子どもの自己知覚やそれに伴う感情を理解することは、彼らの社会的問題の原因や結果を明らかにするだけでなく、有効的な介入指導を計画するのに役立つと考えられる。例えば、引っ込み思案の子どもや社会的コンピテンスに乏しい子どもは、社会的な不安感をもつために友好的に仲間と相互作用できないのかもしれない。また介入指導を受ける場合にも、孤独感や不満を感じながらも仲間関係を求めている子どもほど、自分の仲間関係を改善するのに役立つ新しい社会的スキルを学習したいと動機づけられるであろう。

孤独感、社会的不安感、仲間回避感は仲間集団内における苦痛や不満に対する子どもの見方を表す重要な指標であると考えられてきた(Asher & Wheeler, 1985; Crick & Ladd, 1993; Hymel & Franke, 1985)。例えば, Asher & Wheeler (1985)は小3~小6の子どもを5つの地位群のいずれかに分類し、各群の孤独感を比較している。その結果、拒否児群は人気児群よりも有意に高い孤独感を報告するが、無視児群は人気児群と差がなかった。同様の結果は、その後の研究でも追証されている(Cassidy & Asher, 1992; 前田, 1995; Parkhurst & Asher, 1992; 佐藤・佐藤・高山, 1990)。

自分の仲間関係やコンピテンスに関する子どもの自己知覚は、あくまで子ども自身の主観的な知覚である。最近のいくつかの研究(Hymel, Bowker, & Woody, 1993; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990)では、仲間や教師による知覚やテスト結果などを客観的な知覚得点とみなし、これと子どもの主観的な自己知覚得点とを比較している。例えば, Patter-

son, Kupersmidt, & Griesler (1990)は Harter (1985)の自己知覚尺度の中から、社会的受容、学業、行動、全般的自己価値感の4尺度を使用し、それぞれの自己評価得点を主観的得点とした。他方、ソシオメトリック評定法の平均評定値、学力検査の成績、学級適応評定尺度の教師評定結果をそれぞれ社会的受容、学業、行動の各領域に対応する客観的得点として、各領域の主観的得点と比較している。その結果、社会的受容領域では人気児群と平均児群の主観的得点は客観的得点よりも低く、自分は仲間から受容されていないと過小評価した。それに対して、拒否児群は自分が仲間から受容されていると過大評価した。行動領域でも、拒否児群は自分の行動的コンピテンスを過大評価する傾向にあったが、無視児群は逆に過小評価した。学業領域ではいずれの地位群でも主観的得点と客観的得点間に差はなかった。

Patterson, Kupersmidt, & Griesler (1990)の研究結果は、拒否児が自己の行動的コンピテンスを不正確に知覚しているだけでなく、仲間集団内で自分が拒否児の地位にあることさえ十分に自覚していない可能性を示唆する。しかし、社会的受容の自己知覚と他者知覚を比較した研究(Hymel, Bowker, & Woody, 1993; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990)は、いずれも Harter (1985)の自己知覚尺度の一部を使用しており、自分が仲間全体から受容されている程度を漠然と自己評定させている。そのため、特定の仲間からは受容されているが、他の仲間からは拒否されていると思っている子どもは、自己評定にあたって仲間全体からの受容度を平均化しなければならない。本研究では、同性の仲間一人ひとりからどの程度受容されていると思うかを自己評定させ、その後で平均値(認知受容得点)を求めた。この方法はソシオメトリック評定法の平均評定値(仲間評定による受容得点)の算出方法とも類似しており、自己知覚と仲間知覚の比較には以前の自己評定法よりも適していると考えられる。また、本研究では従来の研究で検討されていない好意度得点についても地位群間および学年間で比較検討することにした。好意度得点は、各子どもが仲間一人ひとりを受容する程度を評定させ、その平均値を求めたものである。もし、拒否児が仲間から受容されている程度を実際以上に高く自己評定しているならば、彼らが仲間を受容する程度(好意度得点)も高くなると考えられる。逆に、仲間からの受容度を低く自己評定しているならば、好意度得点も低くなるであろう。

本研究の主な目的は、ソシオメトリック評定法に基づく社会的受容度について仲間評定と自己評定を実施し、地位群間差に関する以下の予想を検証することである。あわせて、社会的受容度の自己知覚と仲間知覚について学年差および性差についても検討する。まずソシオメトリック指名法を実施し、その結果から各子どもを人気児群、拒否児群、平均児群および無視児群に分類した。次に、ソシオメトリック評定法と認知評定法を実施し、仲間から実際に受容されている程度(受容得点)、仲間を受容する程度(好意度得点)および仲間から受容されていると自己評定する程度(認知受容得点)を算出した。以前の研究(Hymel, Bowker, & Woody, 1993; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990)を参考にすると、次のような結果が予想される。

- ①受容得点では人気児群が無視児群や拒否児群よりも多いただろう。
- ②好意度得点でも人気児群が無視児群や拒否児群よりも多いが、拒否児群の値もそれほど低くはないであろう。
- ③認知受容得点では拒否児群の値も高くなり、地位群間差が小さくなるであろう。
- ④人気児群や平均児群の受容得点は認知受容得点よりも多く、自己の社会的受容度を過小評価するが、拒否児群は逆に過大評価するであろう。

## 方 法

**対象児** 対象児は愛媛大学教育学部附属小学校の小1（112名）、小3（111名）、小4（109名）、小5（101名）、小6（108名）の計541名であった。男女の内訳は表1に示すとおりである。

表1 各地位群の人数内訳と分類基準

地位群	分類基準	小1		小3		小4		小5		小6						
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女					
人気児群	$SP > 1, L > 0, D < 0$	15	16	31	15	14	29	14	13	27	18	18	36	11	17	28
拒否児群	$SP < -1, L < 0, D > 0$	10	13	23	12	13	25	9	15	24	8	13	21	11	13	24
平均児群	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	21	16	37	21	19	40	18	12	30	9	9	18	26	13	39
無視児群	$SI < -1, L < 0, D < 0$	11	10	21	8	9	17	16	12	28	13	13	26	8	9	17
	計	57	55	112	56	55	111	57	52	109	48	53	101	56	52	108

**手続き** (1)ソシオメトリック指名法：クラスの男子には男子全員の名簿を、女子には女子全員の名簿を印刷して渡し、「あなたが小学校で一緒に遊びたい子」（肯定的指名）と「あなたが小学校で一緒に遊びたくない子」（否定的指名）をそれぞれ3名以内ずつ選んで、その名簿番号を回答欄に記入させた。

(2)ソシオメトリック評定法：(1)と同様に同性の仲間全員の名簿を印刷して渡し、「あなたはクラスのお友達と、どのくらい一緒に遊びたいと思っていますか」と質問して、同性仲間全員について3段階で評定させた。評定方法は「遊びたい子」には◎を、「あまり、遊びたくない子」には△を、「どっちかという、遊びたい子」には○を付けさせた。

(3)認知ソシオメトリック評定法：(2)と同様に同性仲間全員の名簿を印刷して渡し、「クラスのお友達は、あなたとどのくらい一緒に遊びたいと思っているのでしょうか」と質問して、仲間全員について3段階で評定させた。評定方法は(2)と同様であった。

**得点化の方法** (1)ソシオメトリック指名法の得点と地位群分類の方法：対象児ごとに、仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。これらの集計した肯定的指名数と否定的指名数について、本人を除くクラスの同性仲間数で除算し、仲間一人当たりからの指名数を算出した。その後、男女別に各学年の3クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点に変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP = L - D$ ）と社会的影響力得点（ $SI = L + D$ ）を算出した。これらの得点に表1の分類基準（Coie & Dodge, 1988）を適用し、各対象児をいずれかの地位群に分類した。なお、地位群分類の結果、次の子どもたちは表1の4地位群のいずれにも該当しなかったため、本研究の分析対象から除外した。小1男子（3名）、小3男子（3名）、小4男子（1名）、小5男子（5名）、小6男子（0名）、小1女子（2名）、小3女子（1名）、小4女子（4名）、小5女子（3名）、小6女子（0名）。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：①受容得点（仲間から実際に受容されている程度）と②好意度得点（各子どもが仲間のそれぞれを受容している程度）の2つの得点を算出した。

①受容得点：対象児ごとに、仲間から◎を付けられた場合に評定値3を、○を付けられた場合に評定値2を、△を付けられた場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。この

後、その合計得点を評定した仲間数で除算し、仲間一人当たりからの平均評定値を算出し、これを受容得点とした。受容得点は各対象児が多数の仲間から実際に受容されている程度を集約したものである。本研究では各対象児が仲間から受容されている程度を表す客観的な指標として、受容得点を使用することにした。

②好意度得点：各対象児が仲間全員を評定するときに、◎を付けた場合に評定値3を、○を付けた場合に評定値2を、△を付けた場合に評定値1を配点し、仲間全員に対する評定値の合計得点を求めた。この後、その合計得点を仲間数で除算し、仲間一人当たりに対する平均評定値を算出し、これを好意度得点とした。好意度得点は各対象児が同性の仲間それぞれに対して好意を示す程度を同性仲間全員について集約したものである。本研究では仲間に対する好意度を表す主観的な指標として、好意度得点を使用することにした。

(3)認知ソシオメトリック評定法の得点：③認知受容得点（仲間から受容されていると自己評定する程度）を算出した。各対象児がそれぞれの同性仲間から◎を付けられていると自己評定した場合に評定値3を、○を付けられていると自己評定した場合に評定値2を、△を付けられていると自己評定した場合に評定値1を配点し、自己評定値の合計得点を求めた。この後、その合計得点を仲間数で除算し、仲間一人当たりからの平均自己評定値を算出し、これを認知受容得点とした。認知受容得点は各子どもが仲間からどの程度受容されているかを自己評定し、その得点を集約したものである。本研究では仲間からどの程度受容されていると本人が自己評定するかに関する主観的な指標として、認知受容得点を使用することにした。

## 結 果

### 群間比較の結果

(1)受容得点：表2は、受容得点について各群の平均値とSDを示したものである。表2に基づいて5（学年）×2（性別）×4（群）の分散分析を行った。その結果、学年の主効果が $F(4, 501) = 6.35, p < .001$ で有意となり、小6（ $M = 2.27$ ）は小4（ $M = 2.20$ ）、小5（ $M = 2.14$ ）、小3（ $M = 2.13$ ）よりも、小1（ $M = 2.24$ ）は小5と小3よりも有意に多かった（小6 > 小4は $p < .05$ ；他は $p < .01$ ）。性別の主効果は $F(1, 501) = 3.33, p < .10$ で有意傾向

表2 各群の受容得点の平均値 ( )内はSD

	人気児群		拒否児群		平均児群		無視児群	
	男	女	男	女	男	女	男	女
小 1	2.51 (0.22)	2.60 (0.17)	1.82 (0.30)	1.86 (0.15)	2.17 (0.23)	2.38 (0.25)	2.26 (0.26)	2.31 (0.24)
小 3	2.45 (0.14)	2.63 (0.19)	1.77 (0.39)	1.59 (0.26)	2.21 (0.21)	2.18 (0.26)	1.97 (0.15)	2.27 (0.25)
小 4	2.49 (0.21)	2.54 (0.17)	1.73 (0.26)	1.85 (0.21)	2.25 (0.31)	2.35 (0.19)	2.19 (0.25)	2.20 (0.20)
小 5	2.42 (0.22)	2.53 (0.19)	1.69 (0.20)	1.72 (0.17)	2.31 (0.26)	2.26 (0.24)	2.12 (0.19)	2.11 (0.26)
小 6	2.73 (0.14)	2.62 (0.19)	1.77 (0.33)	1.80 (0.27)	2.39 (0.21)	2.36 (0.26)	2.31 (0.15)	2.22 (0.35)

を示し、女子 ( $M = 2.22$ ) が男子 ( $M = 2.18$ ) よりも多い傾向にあった。群の主効果は  $F(3, 501) = 234.58, p < .001$  で有意となった。人気児群 ( $M = 2.54$ ) が最も多く、次に平均児群 ( $M = 2.28$ )、無視児群 ( $M = 2.19$ ) となり、拒否児群 ( $M = 1.76$ ) が最も少なかった。群間比較の結果、各群間の差はすべて有意であった (いずれも  $p < .01$ )。

(2)好意度得点：表3は、好意度得点について各群の平均値とSDを示したものである。表3に基づいて5(学年)×2(性別)×4(群)の分散分析を行った。その結果、学年の主効果が  $F(4, 501) = 6.21, p < .001$  で有意となり、小6 ( $M = 2.33$ ) は小4 ( $M = 2.19$ )、小3 ( $M = 2.15$ )、小5 ( $M = 2.13$ ) よりも、小1 ( $M = 2.27$ ) は小3や小5よりもそれぞれ有意に多かった (小1 > 小3は  $p < .05$ ; 他は  $p < .01$ )。性別の主効果は  $F(1, 501) = 2.89, p < .10$  で有意傾向を示し、女子 ( $M = 2.24$ ) が男子 ( $M = 2.19$ ) よりも多い傾向にあった。群の主効果は  $F(3, 501) = 5.08, p < .005$  で有意となった。人気児群 ( $M = 2.29$ ) が最も多く、次に平均児群 ( $M = 2.25$ ) となり、無視児群 ( $M = 2.16$ ) と拒否児群 ( $M = 2.16$ ) が最も少なかった。群間比較の結果、人気児群は無視児群や拒否児群よりも有意に多かった (いずれも  $p < .01$ )。

表3 各群の好意度得点の平均値 ( )内はSD

	人気児群		拒否児群		平均児群		無視児群	
	男	女	男	女	男	女	男	女
小 1	2.43 (0.37)	2.23 (0.40)	2.16 (0.32)	2.39 (0.25)	2.33 (0.37)	2.30 (0.44)	1.95 (0.25)	2.34 (0.42)
小 3	2.20 (0.28)	2.27 (0.30)	2.10 (0.25)	1.98 (0.21)	2.17 (0.22)	2.18 (0.25)	2.05 (0.26)	2.25 (0.35)
小 4	2.21 (0.36)	2.38 (0.34)	1.89 (0.27)	2.10 (0.22)	2.32 (0.34)	2.35 (0.27)	2.21 (0.32)	2.09 (0.30)
小 5	2.29 (0.40)	2.20 (0.28)	2.05 (0.36)	2.26 (0.39)	1.99 (0.30)	2.12 (0.27)	2.00 (0.21)	2.15 (0.34)
小 6	2.40 (0.25)	2.37 (0.31)	2.32 (0.30)	2.29 (0.42)	2.30 (0.30)	2.26 (0.24)	2.42 (0.17)	2.26 (0.20)

(3)認知受容得点：表4は、認知受容得点について各群の平均値とSDを示したものである。表4に基づいて5(学年)×2(性別)×4(群)の分散分析を行った。その結果、学年の主効果が  $F(4, 501) = 2.97, p < .05$  で有意となった。小1 ( $M = 2.08$ ) が最も多く、次に小6 ( $M = 2.03$ )、小4 ( $M = 1.99$ ) となり、小3 ( $M = 1.95$ ) と小5 ( $M = 1.93$ ) が最も少なかった。学年間比較の結果、小1は小3や小5よりも、小6は小5よりもそれぞれ有意に多かった (いずれも  $p < .05$ )。性別の主効果は  $F(1, 501) = 3.99, p < .05$  で有意となり、女子 ( $M = 2.03$ ) が男子 ( $M = 1.96$ ) よりも有意に多かった ( $p < .05$ )。群の主効果は  $F(3, 501) = 10.04, p < .001$  で有意となった。群間比較の結果、人気児群 ( $M = 2.14$ ) が平均児群 ( $M = 2.01$ )、無視児群 ( $M = 1.96$ )、拒否児群 ( $M = 1.91$ ) の3群よりも有意に多かった (いずれも  $p < .01$ )。学年×群の交互作用は  $F(12, 501) = 1.81, p < .05$  で有意となった。表5の認知受容得点は、この交互作用に関連する各群の平均値とSDを示したものである。多重比較の結果、小1では人気児群が無視児群よりも、小4では人気児群、平均児群および無視児群の3群が拒否児群よりも、小5では人気児群が平均児群よりも有意に多かったが、他の学年の群間差は有意でなかつた。

った。また、拒否児群では小1が小3や小4よりも、小6が小4よりもそれぞれ有意に多く、平均児群では小1が小5よりも有意に多かった（いずれも  $p < .05$ ）。性別×群の交互作用も  $F(3, 501) = 4.07, p < .01$  で有意となった。表6の認知受容得点は、この交互作用に関連する各群の平均値とSDを示したものである。多重比較の結果、男子では人気児群が他の3群よりも、平均児群が無視児群や拒否児群よりも有意に多かった（人>無と人>拒は  $p < .01$ ；他は  $p < .05$ ）。それに対して、女子の人気児群は平均児群や拒否児群よりも有意に多かった（いずれも  $p < .05$ ）が、無視児群とは有意差がなかった。また、無視児群では女子が男子よりも有意に多かった（ $p < .01$ ）。

表4 各群の認知受容得点の平均値 ( )内はSD

	人気児群		拒否児群		平均児群		無視児群	
	男	女	男	女	男	女	男	女
小 1	2.19 (0.37)	2.16 (0.43)	1.96 (0.34)	2.27 (0.35)	2.17 (0.41)	2.08 (0.48)	1.69 (0.37)	2.14 (0.33)
小 3	2.07 (0.30)	2.07 (0.32)	1.85 (0.29)	1.81 (0.34)	2.00 (0.41)	1.91 (0.34)	1.70 (0.42)	2.18 (0.26)
小 4	2.25 (0.31)	2.13 (0.34)	1.57 (0.36)	1.81 (0.41)	2.00 (0.40)	2.08 (0.20)	1.98 (0.39)	2.08 (0.52)
小 5	2.08 (0.32)	2.14 (0.24)	1.91 (0.38)	1.88 (0.37)	1.80 (0.22)	1.83 (0.30)	1.82 (0.29)	1.96 (0.26)
小 6	2.19 (0.37)	2.15 (0.36)	1.93 (0.31)	1.99 (0.46)	2.06 (0.31)	1.87 (0.26)	2.05 (0.15)	2.05 (0.25)

(4)受容得点と認知受容得点の差：表5は、学年別に各地位群の受容得点、好意度得点および認知受容得点の平均値とSDを示したものである。表5に基づいて、対応のあるt検定を使用して各群の受容得点と認知受容得点間の差を検定した。その結果、人気児群では小1 ( $t = 4.83, df = 30, p < .001$ )、小3 ( $t = 7.93, df = 28, p < .001$ )、小4 ( $t = 4.17, df = 26, p < .001$ )、小5 ( $t = 6.34, df = 35, p < .001$ )、小6 ( $t = 7.14, df = 27, p < .001$ )のいずれの学年でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。拒否児群では小1 ( $t = 3.42, df = 22, p < .005$ )、小5 ( $t = 2.13, df = 20, p < .05$ )、小6 ( $t = 1.72, df = 23, p < .10$ )の学年において、受容得点が認知受容得点よりも有意に少なかった。しかし、小3 ( $t = 1.70, df = 24, ns$ )と小4 ( $t = 1.06, df = 23, ns$ )の受容得点と認知受容得点間には有意差が見られなかった。平均児群では小1の受容得点と認知受容得点間には有意差が見られなかった ( $t = 1.49, df = 36, ns$ )が、小3 ( $t = 3.33, df = 39, p < .002$ )、小4 ( $t = 3.81, df = 29, p < .001$ )、小5 ( $t = 7.36, df = 17, p < .001$ )、小6 ( $t = 8.41, df = 38, p < .001$ )の4学年ではいずれも受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。無視児群では小1 ( $t = 3.49, df = 20, p < .005$ )、小3 ( $t = 1.83, df = 16, p < .10$ )、小4 ( $t = 1.77, df = 27, p < .10$ )、小5 ( $t = 3.02, df = 25, p < .01$ )、小6 ( $t = 3.21, df = 16, p < .01$ )となり、いずれの学年でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多いか、多い傾向にあった。

表6は、男女別に各地位群の受容得点、好意度得点および認知受容得点の平均値とSDを示したものである。表6についても対応のあるt検定を使用して各群の受容得点と認知受容得点間の差を検定した。その結果、人気児群では男子 ( $t = 7.95, df = 72, p < .001$ )でも女子

( $t = 10.84$ ,  $df = 77$ ,  $p < .001$ )でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。拒否児群では男子の受容得点と認知受容得点間には有意差が見られなかった( $t = 1.43$ ,  $df = 49$ , ns)が、女子( $t = 3.41$ ,  $df = 66$ ,  $p < .002$ )では受容得点が認知受容得点よりも有意に少なかった。平均児群では男子( $t = 5.54$ ,  $df = 94$ ,  $p < .001$ )でも女子( $t = 6.67$ ,  $df = 68$ ,  $p < .001$ )でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。無視児群では男子( $t = 5.95$ ,  $df = 55$ ,  $p < .001$ )でも女子( $t = 2.32$ ,  $df = 52$ ,  $p < .05$ )でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。

表5 各群の受容得点, 好意度得点および認知受容得点の平均値  
( )内はSD

		人気児群	拒否児群	平均児群	無視児群
小1	N	31	23	37	21
	受容得点	2.55(0.20)	1.84(0.23)	2.26(0.26)	2.28(0.25)
	好意度得点	2.33(0.40)	2.29(0.30)	2.32(0.40)	2.13(0.39)
	認知受容得点	2.17(0.40)	2.14(0.38)	2.13(0.45)	1.90(0.42)
小3	N	29	25	40	17
	受容得点	2.54(0.19)	1.68(0.34)	2.19(0.24)	2.13(0.25)
	好意度得点	2.23(0.29)	2.04(0.24)	2.18(0.23)	2.16(0.33)
	認知受容得点	2.07(0.31)	1.83(0.32)	1.96(0.38)	1.96(0.42)
小4	N	27	24	30	28
	受容得点	2.51(0.19)	1.80(0.24)	2.29(0.27)	2.19(0.23)
	好意度得点	2.29(0.36)	2.02(0.26)	2.33(0.32)	2.16(0.32)
	認知受容得点	2.19(0.33)	1.72(0.41)	2.03(0.34)	2.02(0.45)
小5	N	36	21	18	26
	受容得点	2.47(0.21)	1.71(0.18)	2.28(0.25)	2.11(0.23)
	好意度得点	2.25(0.35)	2.18(0.39)	2.06(0.30)	2.08(0.29)
	認知受容得点	2.11(0.29)	1.89(0.38)	1.82(0.27)	1.89(0.28)
小6	N	28	24	39	17
	受容得点	2.66(0.18)	1.78(0.30)	2.38(0.23)	2.26(0.28)
	好意度得点	2.38(0.29)	2.30(0.37)	2.29(0.28)	2.34(0.20)
	認知受容得点	2.17(0.36)	1.96(0.40)	2.00(0.31)	2.05(0.21)

(5)受容得点と好意度得点の差：表5に基づいて、対応のあるt検定を使用して学年別に各群の受容得点と好意度得点間の差を検定した。その結果、人気児群では小1( $t = 2.82$ ,  $df = 30$ ,  $p < .01$ ), 小3( $t = 5.05$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ ), 小4( $t = 3.14$ ,  $df = 26$ ,  $p < .005$ ), 小5( $t = 2.98$ ,  $df = 35$ ,  $p < .01$ ), 小6( $t = 4.97$ ,  $df = 27$ ,  $p < .001$ )のいずれの学年でも受容得点が好意度得点よりも有意に多かった。拒否児群では小1( $t = 5.86$ ,  $df = 22$ ,  $p < .001$ ), 小3( $t = 4.32$ ,  $df = 24$ ,  $p < .001$ ), 小4( $t = 3.55$ ,  $df = 23$ ,  $p < .002$ ), 小5( $t = 4.45$ ,  $df = 20$ ,  $p < .001$ ), 小6( $t = 6.56$ ,  $df = 23$ ,  $p < .001$ )のいずれの学年でも受容得点が好意度得点よりも有意に少なかった。平均児群では小5( $t = 3.32$ ,  $df = 17$ ,  $p < .005$ )の受容得点が好意度得点よりも有意に多かったが、他の4学年では受容得点と認知受容得点間の差は有意でなかった(小1は $t = 0.61$ ,  $df = 36$ , ns; 小3は $t = 0.31$ ,  $df = 39$ , ns; 小4は $t = 0.60$ ,  $df = 29$ , ns; 小6は $t = 1.62$ ,  $df = 38$ , ns)。無視児群では、いずれの学年でも受容得点と好意度得点

の差は有意でなかった（小1は  $t = 1.21$ ,  $df = 20$ , ns；小3は  $t = 0.27$ ,  $df = 16$ , ns；小4は  $t = 0.49$ ,  $df = 27$ , ns；小5は  $t = 0.44$ ,  $df = 25$ , ns；小6は  $t = 0.81$ ,  $df = 16$ , ns）。

同様に、表6に基づいて男女別に各群の受容得点と好意度得点間の差を検定した。その結果、人気児群では男子 ( $t = 4.43$ ,  $df = 72$ ,  $p < .001$ )でも女子 ( $t = 7.00$ ,  $df = 77$ ,  $p < .001$ )でも受容得点が好意度得点よりも有意に多かった。拒否児群では男子 ( $t = 5.80$ ,  $df = 49$ ,  $p < .001$ )でも女子 ( $t = 9.46$ ,  $df = 66$ ,  $p < .001$ )でも受容得点が好意度得点よりも有意に少なかった。平均児群や無視児群では、男子と女子のいずれでも受容得点と好意度得点間に有意差は見られなかった（平均児群の男子は  $t = 0.38$ ,  $df = 94$ , ns；女子は  $t = 1.09$ ,  $df = 68$ , ns；無視児群の男子は  $t = 1.10$ ,  $df = 55$ , ns；女子は  $t = 0.09$ ,  $df = 52$ , ns）。

表6 各群の受容得点、好意度得点および認知受容得点の平均値  
( )内はSD

		人気児群	拒否児群	平均児群	無視児群
男子	N	73	50	95	56
	受容得点	2.51(0.21)	1.76(0.31)	2.27(0.26)	2.17(0.24)
	好意度得点	2.30(0.36)	2.12(0.33)	2.25(0.33)	2.12(0.30)
	認知受容得点	2.15(0.34)	1.85(0.36)	2.04(0.38)	1.86(0.37)
女子	N	78	67	69	53
	受容得点	2.58(0.19)	1.76(0.24)	2.30(0.26)	2.21(0.27)
	好意度得点	2.29(0.34)	2.20(0.34)	2.25(0.32)	2.21(0.34)
	認知受容得点	2.13(0.34)	1.95(0.43)	1.96(0.36)	2.07(0.36)

(6)好意度得点と認知受容得点の差：表5に基づいて、学年別に各群の好意度得点と認知受容得点間の差を検定した。その結果、小4の人気児群と無視児群では好意度得点と認知受容得点間に有意差がなかったが、他の地位群および他の学年の地位群ではすべて好意度得点が認知受容得点よりも有意に多かった。対応のある  $t$  検定の結果、人気児群では小1 ( $t = 2.36$ ,  $df = 30$ ,  $p < .05$ )、小3 ( $t = 2.90$ ,  $df = 28$ ,  $p < .01$ )、小4 ( $t = 1.18$ ,  $df = 26$ , ns)、小5 ( $t = 2.71$ ,  $df = 35$ ,  $p < .02$ )、小6 ( $t = 3.47$ ,  $df = 27$ ,  $p < .002$ )、拒否児群では小1 ( $t = 2.71$ ,  $df = 22$ ,  $p < .02$ )、小3 ( $t = 3.31$ ,  $df = 24$ ,  $p < .005$ )、小4 ( $t = 4.08$ ,  $df = 23$ ,  $p < .001$ )、小5 ( $t = 3.36$ ,  $df = 20$ ,  $p < .005$ )、小6 ( $t = 4.11$ ,  $df = 23$ ,  $p < .001$ )、平均児群では小1 ( $t = 2.97$ ,  $df = 36$ ,  $p < .01$ )、小3 ( $t = 3.90$ ,  $df = 39$ ,  $p < .001$ )、小4 ( $t = 4.97$ ,  $df = 29$ ,  $p < .001$ )、小5 ( $t = 4.83$ ,  $df = 17$ ,  $p < .001$ )、小6 ( $t = 5.90$ ,  $df = 38$ ,  $p < .001$ )、無視児群では小1 ( $t = 3.23$ ,  $df = 20$ ,  $p < .005$ )、小3 ( $t = 2.81$ ,  $df = 16$ ,  $p < .02$ )、小4 ( $t = 1.66$ ,  $df = 27$ , ns)、小5 ( $t = 3.22$ ,  $df = 25$ ,  $p < .005$ )、小6 ( $t = 4.30$ ,  $df = 16$ ,  $p < .001$ )であった。

同様に、表6に基づいて男女別に各群の好意度得点と認知受容得点間の差を検定した。その結果、男子と女子のいずれの地位群でも好意度得点が認知受容得点よりも有意に多かった。対応のある  $t$  検定の結果、人気児群では男子 ( $t = 4.26$ ,  $df = 72$ ,  $p < .001$ )、女子 ( $t = 3.59$ ,  $df = 77$ ,  $p < .001$ )、拒否児群では男子 ( $t = 5.31$ ,  $df = 49$ ,  $p < .001$ )、女子 ( $t = 5.84$ ,  $df = 66$ ,  $p < .001$ )、平均児群では男子 ( $t = 6.86$ ,  $df = 94$ ,  $p < .001$ )、女子 ( $t = 6.63$ ,  $df = 68$ ,  $p < .001$ )、無視児群では男子 ( $t = 6.60$ ,  $df = 55$ ,  $p < .001$ )、女子 ( $t = 2.69$ ,  $df = 52$ ,  $p < .02$ )であった。



(7)受容の仲間評定と認知受容の自己評定間の一致率

表7の上段は、仲間によるソシオメトリック評定と本人による認知受容の自己評定との一致数を集計し、仲間によるソシオメトリック評定数に占めるその比率(%)を評定値別に示したものである。したがって、%の値が高いほど、仲間評定と自己評定が一致し、自己の社会的受容を正確に知覚していることを意味する。評定値別に各対象児の%を角変換した値に基づいて、2(性別)×4(群)の分散分析を行った。その結果、評定値1では群の主効果が $F(3, 533) = 4.80, p < .005$ で有意となり、人気児群(39.0%)が拒否児群(40.7%)、無視児群(43.5%)、平均児群(43.8%)よりも有意に少なかった(いずれも $p < .01$ )。評定値2ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。評定値3では群の主効果が $F(3, 533) = 3.74, p < .05$ で有意となり、人気児群(43.1%)が拒否児群(39.3%)や無視児群(33.1%)よりも有意に多かった。評定値1から3までの合計数でも群の主効果が $F(3, 533) = 3.50, p < .05$ で有意となり、人気児群(44.4%)や拒否児群(42.6%)が無視児群(38.4%)よりも有意に多かった。また、性別の主効果は $F(1, 533) = 3.15, p < .10$ で有意傾向を示し、男子(43.0%)が女子(40.6%)よりも多い傾向にあった。

表7 受容と認知受容の一致率および好意度と認知受容の一致率 数値は%

	人気児群		拒否児群		平均児群		無視児群	
	男 (N=73)	女 (N=78)	男 (N=50)	女 (N=67)	男 (N=95)	女 (N=69)	男 (N=56)	女 (N=53)
(1)受容の仲間評定と自己評定間の一致率								
評定値1	37.8	40.7	43.2	38.8	43.3	44.4	52.1	33.5
評定値2	47.6	49.5	48.8	45.9	41.9	43.5	41.8	39.8
評定値3	46.2	40.4	35.2	42.5	42.0	35.1	32.3	33.9
合計数	45.8	43.1	43.4	42.0	42.2	39.7	40.3	36.4
(2)好意度と認知受容の自己評定間の一致率								
評定値1	70.1	52.9	74.9	70.5	69.7	68.9	74.4	58.7
評定値2	66.3	60.2	55.8	59.0	55.5	59.7	53.0	51.7
評定値3	63.0	53.2	39.5	47.5	52.6	46.5	44.5	53.1
合計数	65.4	55.5	54.6	56.7	56.9	55.7	55.2	53.7

(8)仲間に対する好意度評定と認知受容の自己評定間の一致率

表7の下段は、同性仲間に対する好意度評定と認知受容の自己評定との一致数を集計し、仲間に対する好意度評定数に占めるその比率(%)を評定値別に示したものである。したがって、%の値が高いほど、好意度評定をした仲間から自分も同じ評定をされていると認知する傾向にあることを意味する。評定値別に各対象児の%を角変換した値に基づいて、2(性別)×4(群)の分散分析を行った。その結果、評定値1では群の主効果が $F(3, 533) = 4.38, p < .01$ で有意となり、人気児群(61.0%)が無視児群(67.5%)、平均児群(69.3%)、拒否児群(72.5%)よりも有意に少なかった(人<拒は $p < .01$ ;他は $p < .05$ )。また性別の主効果も $F(1, 533) = 9.29, p < .005$ で有意となり、男子(72.1%)が女子(63.2%)よりも有意に多かった。評定値2ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。評定値3では群の主効果が $F(3, 533) = 8.04, p < .001$ で有意となり、人気児群(57.9%)が平均児群(50.0%)、無視児群(48.9%)、拒否児群(44.4%)の3群よりも有意に多かった(いずれも $p < .01$ )。評定値1から3

までの合計数では性別の主効果が  $F(1, 533) = 3.40, p < .10$  で有意傾向を示し、男子 (58.4%) が女子 (55.5%) よりも多い傾向にあった。

### 相関係数

表8は、指名法のL得点(肯定的指名得点)とD得点(否定的指名得点)、評定法の受容得点と好意度得点、認知評定法の認知受容得点の5つの得点間の相関係数を学年別にまとめたものである。表8から、いずれの学年でもL得点は受容得点と有意な正相関を、D得点は受容得点と有意な負相関を示し、仲間から積極的に好かれる子どもほど仲間から受容され、拒否される子どもほど仲間から受容されていないことが分かる。受容得点と認知受容得点の相関は、小1を除く他の4学年では正相関を示し、仲間から実際に受容されている子どもほど自分でも仲間から受容されていると自己評定する関係にあった。好意度得点と認知受容得点の相関値はいずれの学年でも高い正相関を示し、自分が好意を示す仲間ほど自分を受容していると認知する関係にあった。興味深いのは、受容得点、L得点、D得点の3得点のそれぞれと好意度得点の相関値である。小3や小4では有意な正相関や負相関が見られるが、他の学年では明確な相関を示していない。仲間から実際に受容され、好かれ、拒否されていない子どもほど仲間を好意的に評定する傾向は小学校中学年の小3と小4において顕著であるといえる。

表8 各得点間のピアソン積率相関係数

	小 1 (N=112)	小 3 (N=111)	小 4 (N=109)	小 5 (N=101)	小 6 (N=108)
受容得点と好意度得点	-.05	.21*	.37**	-.01	.17+
受容得点と認知受容得点	.05	.28**	.41**	.27**	.31**
好意度得点と認知受容得点	.66**	.53**	.47**	.58**	.48**
L得点と受容得点	.62**	.66**	.62**	.70**	.69**
L得点と好意度得点	.09	.26**	.20*	.13	.10
L得点と認知受容得点	.11	.29**	.30**	.29**	.18+
D得点と受容得点	-.69**	-.71**	-.72**	-.74**	-.80**
D得点と好意度得点	.05	-.20*	-.35**	.07	-.05
D得点と認知受容得点	.04	-.11	-.40**	-.16	-.15
L得点とD得点	-.42**	-.43**	-.43**	-.45**	-.48**

+ :  $p < .10$    \* :  $p < .05$    \*\* :  $p < .01$

## 考 察

受容得点では人気児群が最も多く、次いで平均児群、無視児群となり、拒否児群が最も少なかった。この結果は、本研究の予想①を支持すると共に、ソシオメトリック指名法に基づく4地位群の分類が適切であったことを確認するものである。ただし、無視児群は仲間から受ける肯定的指名数も否定的指名数も共に少ないけれども、仲間からの受容得点は平均児群に近く、拒否児群よりも明らかに高い得点を示した。この結果は以前の研究結果(Hymel & Rubin, 1985; 前田, 1994)と一致し、無視児群が必ずしも仲間から受容されていないわけではないことを示している。

好意度得点と認知受容得点では、予想どおり4群の得点が接近した。人気児群の平均値も低下し、他の3群の値に近づいたけれども、なお好意度得点では無視児群や拒否児群よりも有意に多く、認知受容得点では他の3群よりも有意に多かった。この結果は本研究の予想②や③を支持している。人気児群は実際に仲間から受容される程度も高いが、仲間に対する好意度も高く、仲間から受容される程度も高いと自己評定している。人気児は仲間と好意的・友好的な相互作用をする機会に恵まれ、そのため自己の地位や社会的受容度に関する情報を得やすいのであろう。仲間から受容されているから仲間への好意度も高くなるのか、逆の関係なのかは明らかではないけれども、少なくとも人気児の仲間関係は良循環する関係にあるといえよう。

表3や表4から分かるように、人気児群を除くと、他の3群の好意度得点や認知受容得点には大差が見られない。しかし、これらの得点と受容得点との差を検討すると、人気児群や平均児群では全般に受容得点が認知受容得点よりも有意に多く、自己の社会的受容度を過小評価する傾向にあった。それに対して、拒否児群では受容得点と認知受容得点間に差がないか(小3, 小4)、逆に認知受容得点が受容得点よりも有意に多く(小1, 小5, 小6)、自己の社会的受容度を過大評価する傾向にあった。興味深いことに、無視児群ではどの学年でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多いか、多い傾向にあった。これらの結果は本研究の予想④を支持するものであるが、予想④に含めなかった無視児群も結果から見ると、平均児群とほぼ同様に自己の社会的受容度を過小評価する傾向にあると指摘できる。従来、指名法を実施する場合に否定的指名を求めると、実施後に仲間関係に否定的影響を及ぼすと懸念され、この点を配慮して肯定的指名だけを求めた研究も多い(Hymel & Rubin, 1985)。肯定的指名だけを使用すると、拒否児群も無視児群も共に非人気児群として同質の群であるかのように扱われやすいが、本研究の結果は無視児群が拒否児群とは明らかに異なることを実証している。

本研究の結果は以前の研究(Hymel, Bowker, & Woody, 1993; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990)と同様に、拒否児群が自己の地位や社会的受容度を不正確に知覚し、仲間から拒否されていることを自覚していない可能性を示唆する。拒否児の地位は児童期を通じて維持されやすく、彼らは学年が変わっても攻撃的・破壊的行動を示しやすいと報告されている(Coie & Dodge, 1983)。本研究の結果から、その原因の1つは彼らが自己の地位や社会的受容度を過大評価し、仲間知覚と自己知覚間のズレに気づかないからではないかと指摘できる。自己の地位や自分の行動が仲間に与える影響などを自覚しないのであれば、彼らは仲間に対する自分の行動や態度を改める必要を感じないであろう。その結果として相変わらず攻撃的・破壊的行動を示し、仲間から拒否されるという悪循環を持続させるのではないかと解釈できる。あるいは拒否児の過大評価傾向は自己の地位や社会的受容度に気づいているけれども、それを正確に自覚すると苦痛や不安を感じるという現実から自己を防衛しようとしたことを反映しているのかもしれない。Patterson, Kupersmidt, & Griesler (1990)が指摘するように、拒否児の自己防衛的な自覚回避努力が成功する限り、自己の行動や地位を変容したいという動機づけを慢性的に低下させることになろう。したがって、自己防衛による自己の過大評価であったとしても、長期的に見れば、やはり悪循環の一部を構成することになろう。いずれにしても、本研究の結果は自己知覚の点からも、無視児よりも拒否児が仲間関係の問題を抱えやすい立場にあることを実証するものである。

ところで、受容得点、好意度得点および認知受容得点のいずれにおいても、小1や小6は他の学年よりも高い得点を示した。小1の結果は低学年の仲間関係が実際に高学年の仲間関係よ

りも好意的であることを反映しているよりも、むしろ小1の仲間知覚が他の学年よりも未分化であることを反映しているのではなからうか。つまり、小1では日頃かかわりをもつ仲間全員を区別しないで好意的に見ているのではないだろうか。この解釈は表8の相関係数から示唆される。受容得点と認知受容得点の相関は小1では有意でないのに対して、他の学年では有意な正相関を示しているからである。興味深いことに、小3と小4ではL得点、D得点および受容得点のそれぞれと認知受容得点間に有意な相関が見られた。これらの結果は、実際に仲間から好かれ、受容され、拒否されていない子どもほど、仲間に対しても好意的な評定をする関係にあることを示している。一般に、発達につれて仲間を分化した多様な次元から知覚するようになり、好きな仲間と嫌いな仲間への見方が分化してくると考えられる。しかし、本研究の相関係数を考慮すると、実際に仲間とダイナミックな相互作用をする経験は高学年の小5や小6よりも、むしろ中学年の小3や小4の方が多いのかもしれない。

3つの得点のいずれにおいても、女子は男子よりも有意に多いか、多い傾向を示した。なぜ、女子が仲間を好意的に評定し合うのか、その原因は本研究から明らかではないが、男子と女子の仲間関係の性質にはいくつか異なる点があるのかもしれない。今後の研究では男子と女子の仲間関係を区別すると同時に、社会的受容度と関連する多様な認知的・行動的次元について学年間の発達変化を明らかにしなければならない。

## 要 約

本研究では、小1～小6の子どもを対象にしてソシオメトリック指名法を実施し、その結果から各子どもを人気児群、拒否児群、平均児群および無視児群に分類した。次に、ソシオメトリック評定法と認知評定法を実施し、仲間から実際に受容されている程度（受容得点）、仲間を受容する程度（好意度得点）および仲間から受容されていると自己評定する程度（認知受容得点）を算出した。本研究の主な目的は、これら3つの得点について4地位群間差、学年差および性差を検討することであった。主な結果は以下のとおりであった。

- ①受容得点では小6が小4、小5、小3よりも、小1が小5と小3よりも有意に多かった。また、人気児群>平均児群>無視児群>拒否児群であった。
- ②好意度得点では小6が小4、小3、小5よりも、小1が小3や小5よりも有意に多かった。また、人気児群>無視児群≒拒否児群であった。
- ③認知受容得点では小1が小3や小5よりも、小6が小5よりも、女子が男子よりも有意に多かった。また、人気児群>平均児群≒無視児群≒拒否児群であった。
- ④受容得点と認知受容得点の差を検討したところ、人気児群ではどの学年でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。拒否児群では小1、小5、小6において受容得点が認知受容得点よりも有意に少なかったが、小3と小4の受容得点と認知受容得点間には差がなかった。平均児群では小1の受容得点と認知受容得点間には差がなかったが、他の4学年では受容得点が認知受容得点よりも有意に多かった。無視児群ではどの学年でも受容得点が認知受容得点よりも有意に多いか、多い傾向にあった。
- ⑤受容得点と好意度得点の差を検討したところ、人気児群ではどの学年でも受容得点が好意度得点よりも有意に多かった。それに対して、拒否児群ではどの学年でも受容得点が好意度得点よりも有意に少なかった。平均児群では小5の受容得点が好意度得点よりも有意に多かった

が、他の4学年では受容得点と認知受容得点間に差がなかった。無視児群ではどの学年でも受容得点と好意度得点間に差がなかった。

⑥好意度得点と認知受容得点の差を検討したところ、小4の人気児群と無視児群では好意度得点と認知受容得点間に差がなかったが、他の地位群および他の学年の地位群ではすべて好意度得点が認知受容得点よりも有意に多かった。

⑦受容の仲間評定と認知受容の自己評定間の一致率を検討したところ、評定値1では人気児群<拒否児群≒無視児群≒平均児群であった。それに対して、評定値3では人気児群>拒否児群≒無視児群であった。

⑧仲間に対する好意度評定と認知受容の自己評定間の一致率を検討したところ、評定値1では人気児群<無視児群≒平均児群≒拒否児群であった。また男子>女子であった。それに対して、評定値3では人気児群>平均児群≒無視児群≒拒否児群であった。

⑨得点間の相関係数を求めたところ、受容得点と認知受容得点の相関は小1を除く他の4学年では正相関を示し、仲間から実際に受容されている子どもほど自分でも仲間から受容されていると自己評定する関係にあった。好意度得点と認知受容得点の相関値はいずれの学年でも高い正相関を示し、自分が好意を示す仲間ほど自分を受容していると認知する関係にあった。しかし、受容得点と好意度得点の相関は小3や小4において有意な正相関を示したが、他の3学年では明確な相関を示さなかった。

#### 引用文献

- Asher, S. R., & Wheeler, V. A. 1985 Children's loneliness : A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 500-505.
- Bierman, K. L., & Furman, W. 1984 The effects of social skills training and peer involvement on social adjustment of preadolescents. *Child Development*, 55, 151-162.
- Cassidy, J., & Asher, S. R. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, 63, 350-365.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status : A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school : A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. Cambridge : Cambridge University Press.
- Crick, N. R., & Ladd, G. W. 1993 Children's perceptions of their peer experiences : Attributions, loneliness, social anxiety, and social avoidance. *Developmental Psychology*, 29, 244-254.
- Harter, S. 1985 *Manual for the self-perception profile for children*. University of Denver.
- Hymel, S., Bowker, A., & Woody, E. 1993 Aggressive versus withdrawn unpopular children : Variations in peer and self-perceptions in multiple domains. *Child Development*, 64, 879-896.
- Hymel, S., & Franke, S. 1985 Children's peer relations : Assessing self-perceptions. In B. H. Schneider, K. H. Rubin, & J. E. Ledingham (Eds.), *Children's peer relations : Issues in assessment and intervention*. pp. 75-91. New York : Springer-Verlag.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems : Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*, Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich : JAI Press.

- Hymel, S., & Rubin, K. H., Rowden, L., & LeMare, L. 1990 Children's peer relationship : Longitudinal prediction of internalizing and externalizing problems from middle to late childhood. *Child Development*, 61, 2004-2021 .
- 前田健一 1994 幼児の仲間関係に関する研究－社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメントの地位群間比較と下位群間比較－ 愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学, 41, 1, 71-88.
- 前田健一 1995 児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性, 引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.
- Matson, J. L., & Ollendick, T. H. 1988 *Enhancing children's social skills assessment and training*. New York : Pergamon Press. 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 (訳) 1993 子どもの社会的スキル訓練－社会性を育てるプログラム－ 金剛出版
- Parker, J. G., & Asher, S. R. 1987 Peer relations and later personal adjustment : Are low-accepted children at risk ? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- Parkhurst, J. T., & Asher, S. R. 1992 Peer rejection in middle school : Subgroup differences in behavior, loneliness, and interpersonal concerns. *Developmental Psychology*, 28, 231-241.
- Patterson, C. J., Kupersmidt, J. B., & Griesler, P. C. 1990 Children's perceptions of self and of relationships with others as a function of sociometric status. *Child Development*, 61, 1335-1349.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. New York : Pergamon Press. 高山巖(監訳) 佐藤正二・佐藤容子・前田健一(訳)1992 自尊心の発達と認知行動療法－子どもの自信・自立・自主性をたかめる－ 岩崎学術出版社
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1990 仲間関係に問題をもつ子ども－自己知覚測度による分析－ 宮崎大学教育学部紀要 教育科学 第68号, 9-18.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属小学校の先生方並びに児童の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては井伊三奈さん、市村佳代子さん、河野寿子さん、白石梓さん、土佐香織さん、二神華子さん、三原佳美さん、山田恭子さん、渡邊知美さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。